



いぜん島のサンゴ礁を愛する会

伊是名地区について

伊是名地区は、沖縄本島の北方に位置し、東シナ海に囲まれた周囲16kmの島である。

自然豊かな美しい島で、農民から琉球国王となった尚円王生誕の地として知られる。

基幹産業は、農業と漁業。農業は、サトウキビや水稻。漁業は、モズク養殖が盛んで、他にもヒトエグサ養殖、潜水器漁業（追い込み漁）が営まれ、これら全てがサンゴ礁域を生産基盤としている。

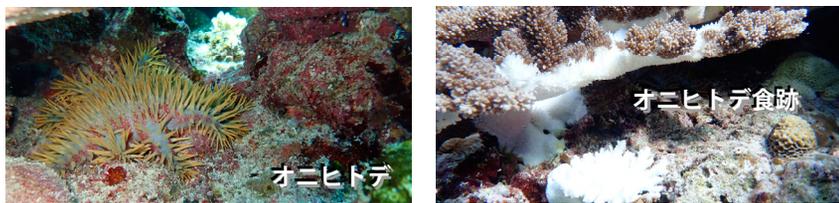


サンゴの現状

地区の漁業を支えるサンゴ礁域には、サンゴ群集（以降、サンゴ）が広く分布する。平成4年に報告されたサンゴの面積は52.5haとされる（第4回自然環境保全基礎調査、環境省）。また、サンゴの被度50%以上を示す区域が、その当時は約3割あり、沖縄本島に比べて多い。

しかし、約20年前に沖縄本土や周辺海域でオニヒトデが大量発生し、サンゴが大幅に減少した。

その後、オニヒトデの大量発生が収まり、7~8年前からはサンゴが回復している。ただし、オニヒトデの大量発生は過去にしばしば確認されており、その抑制はサンゴの維持を図る上で喫緊の課題となっている。また、最近の異常気象（高水温の連続、猛烈な台風）によって大規模なサンゴの白化や生息環境の悪化が懸念される。そのため、サンゴの生育状況を定期的にモニタリングする必要性がその保全を図る上で重要になってきている。



組織の設立と活動の目的

上記した課題から、当該地区の漁業者が中心となり、平成25年度に「いぜん島のサンゴ礁を愛する会」を設立し、サンゴの維持活動をスタートさせた。

体制は、初めは漁業者主体であったが、平成29年からは漁業を兼業で行うダイビングショップと連携し、以下の方針で活動を進めている。

●活動方針

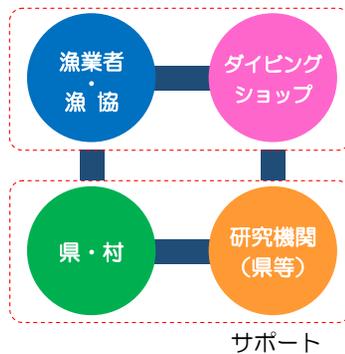
① サンゴを食す生物の大量発生を防ぐ 食害生物の除去

・オニヒトデやレイシガイダマシ等の食害種を場所を決めて、集中的に除去する

② サンゴの生育を定期的に観察し、その維持を図る モニタリング

・サンゴやその生息環境の異常を発見し、早期に対策が図れる体制を整備する

活動組織



サンゴを維持するために

(1) 食害生物の除去

サンゴを食すオニヒトデの大量発生やレイシガイダマシ等の小型巻貝類の増殖を抑制するために、これら食害生物の除去を行い、回復傾向にある島のサンゴの維持を図る。

除去作業は、守るべきサンゴの場所（維持回復の核となる場）を決め、そのエリア内で集中的に行う。

方法は、素潜りもしくはスクーバ潜水で、オニヒトデは穂先の長い手かぎ、レイシガイダマシは徒手やピンセットを用いて採取し、陸揚げし適正に処分する。



(2) モニタリング

サンゴなどの異常を発見し、早期に対策が図れるように、各活動エリア（12箇所）に定線を設定し、サンゴの生育状況を定期的（年2回夏・冬）にモニタリングする。

方法は、各活動エリア内に主に20mのライン2本を用いて十字に測線を張り、30cm×30cm方形枠を用いて0.5m間隔でサンゴの有無が判るような枠写真を撮影する。なお、測線を常時同じ場所に設置できるように、基点と線上の任意の場所に鉄筋を打設している。

撮影した各枠の写真は、後日机上でサンゴの有無を計数し、サンゴが出現した枠数の割合を求め、その値を各活動エリアのサンゴの被度として整理する。



活動の効果と課題

これまで7年間の取り組みの中で、平成26~27年にかけてオニヒトデの生息密度が高まり、年間除去量も最大127個と増加した。しかし、定期的な除去活動によって、それ以降は減少し、令和元年の除去量は17個体と大幅に減少した。一方、活動エリアにおけるサンゴの平均被度は年々増加しており、平成30年は41%となった。

今後も継続的に活動を行い、地区の漁業の生産基盤であるサンゴ礁域の保全を図る。また、現在、構成員が高齢化し、後継者不足が大きな課題となっていることから、後世につなげる体制づくりの検討を進めたい。

サンゴ平均被度%

